

## 房総・船形の『よいこのお墓』と 養育院記念磨崖碑

房総半島の先端、館山の隣に那古の崖観音で有名な大福寺があるが、そこから見下ろす館山湾は絶景である。その一角の墓地に養育院の引き取り手のない物故児童を葬る“よい子のお墓”がある。

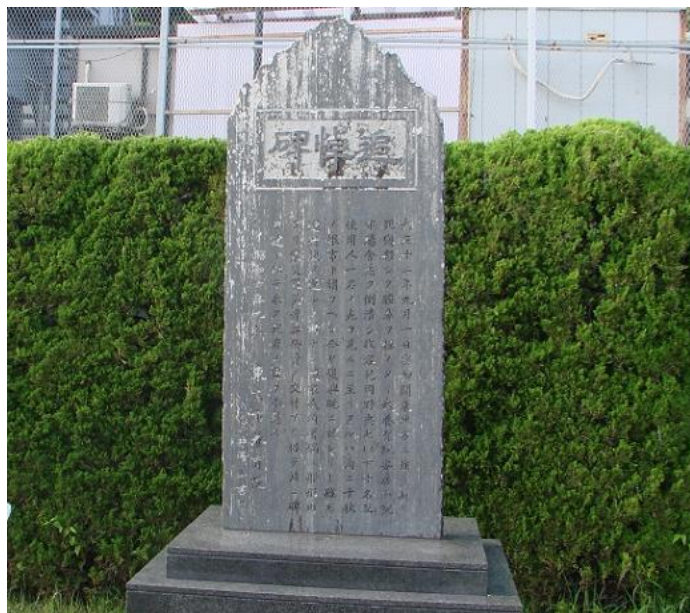
その近くに、明治 42 年に建てられた東京市養育院の安房分院があった。今日東京都社会福祉事業団の“東京都船形学園”として運用されている。

ここには養育院の施設の由来を印した巨大な磨崖碑があり、敷地内に関東大震災の物故者の慰霊碑がある。

東京市養育院は、松平定信の七分積金が東京府に引き継がれたのを活用して、明治 5 年に窮民救済施設として創設された。その運営に渋沢は明治 7 年から関与し、明治 18 年には棄児、迷児の救済を始めている。明治 42 年、医長・入澤達吉は、本院の虚弱児の養育に風光明媚な房総の地を選び、虚弱児童の転地療養施設として安房分院を開設した。そして、此の地でなくなった子供達のために、『よい子のお墓』が建てられている。

また、大正 12 年の関東大震災の大津波で、子供達、職員などが亡くなり慰霊碑が建てられている。現在は姿を変えて、擁護と自立支援が必要な児童の施設となっている。

この施設の裏手に、10メートルに及ぶ巨大な崖を削って作られた、施設の由来を印す磨崖碑があり、日本福祉史の記念碑となっている。



船形町有志によって、大正 6 年 4 月着工、同年 5 月末日竣工した。撰文は二松学舎創立者で、明治の 3 大文人にあげられた三嶋中洲博士、書は青淵の号を持つ、初代養育院長渋沢栄一による。崖の高さは 16m、碑の高さ 10m、幅 6m、一文字の大きさが 30cm 四方という国内有数の碑だったが、岩質のもろい砂岩の房州石に彫られたため風化が著しくわずか数文字がかるうじて判読できるようになってしまった。そのため、80 周年記念に (1989 年)、碑文を刻むミニチュア碑が建てられた。

また 100 周年 (2009 年) に、判読可能なように、大改修が行われた。



# 磨崖碑 碑文のあらまし



明治維新の後、東京府は、自ら窮状を訴えることのできない老人を上野の護国院の土地に收容し養護した。名付けて養育院という。養育院は、後にまた棄児を四〇年間養育した。その数三万七千余人となる。現在(大正三年)は二千四百余人で、そして児童が最も多い。思うに養育院の元手は、白河藩主で、老中の松平定信が寛政の改革時、江戸町民七分積金制度の蓄積が東京府に引き継がれていたものを充てて創始したものである。

これに慈善家の寄付でふやし、養育院長洪沢男爵が公共のために身を顧みずつくしてきたものである。規模は年毎に拡げられた。明治三十三年に身体の極めて弱いものを千葉県船形町に移し養育した。その数百余人である。

建物を新築し、勉強ができるところを設けた。名付けて養育院支院という。約十年で子どもたちの多くは若死を免れることができ、これを聞く者は本当に感心した。東京慈善会(院長夫人が会長)は、この事業を大いに賛成援助した。土地の名望家で土地や金銭を寄贈する人が大変多かった。

近頃、男爵が来臨視察され大変喜ばれ、これからも一層この事業を拡張しようとされ、私を呼んでこれを崖に刻みつけられた。男爵は、そこで文章をつくっていわれた。本当に悲しいことに身寄りがなくて、さらに加えて身体が弱い児たちを同じ仲間としての心をもつ人が、これを養育院と相談し、この房総の海辺に建物を作った。

ここは冬暖かく夏涼しい。病気の人は治癒し、身体の弱い者は強くなる。ここに生活のための仕事を授け、ここで、物事の大綱を教える。常にかわいそうに思うべきである。

これら多くの児が自立して恩を思い、救済事業の志をもつ人が出ないと誰がいえようか。